

平成 12 年度 公開講座概要

総合研究所が担当する平成 12 年度公開講座は、文化講座、社会学部公開講座、桜井市生涯学習シリーズ奈良大学教養講座、都祁村生涯学習シリーズ奈良大学教養講座の四講座を、前年に引き続き開催した。

近畿文化会と共催の文化講座は 21 年目を数え、「世界文化遺産のあるまち・奈良」をテーマに開催、受講申し込み者は、194 名で、全 5 回の講座に、延べ 648 名の受講があった。桜井市、都祁村の教養講座は、それぞれの教育委員会との共催で実施、地元の希望を尊重し、地域に密着したテーマを中心に開催した。桜井市教養講座では、136 名の申し込みで、延べ 352 名が受講し、都祁村教養講座には 64 名の申し込みで、延べ 105 名の受講があった。

また、13 回目の社会学部公開講座は、「異文化体験と国際交流の未来－アジアから見た日本－」をテーマに開催し、延べ 131 名の聴講があった。

桜井市生涯学習シリーズ 奈良大学教養講座

私たちのまわりに目を向けよう
－郷土を学び新しい時代を知る－

6 月 4 日 いま、大和の古代史は楽しい

水野正好

飛鳥は謎めいた歴史の檜舞台。松本清張さんがゾロアスター教の遺物とされて大きな話題となった岡の酒船石も明日香村の調査で斉明天皇の両槻宮の水くばり遺構であることが判明。丘の北裾に石敷の道、テラス、階段が丁寧につくられ、酒船石や溢水（湧水）を桶で受け、石槽へ入れ、亀形水盤にうけて、テラスの溝へ出している様子が明瞭になった。改めて斉明天皇の造宮の実態、規模、新機軸が問われることとなったのである。この両槻宮と関連するものとして飛鳥川東の庭園がある。出水の酒船石がやはり導水施設として設けられたものであり、その北側にひろがる苑池に水を引き、水を躍らせる施設であることが判明したのである。両槻宮の北側、谷道の延長上に富本銭を铸造した飛鳥池遺跡がある。壬申の乱もあり、両槻宮も荒廃し

ていたのであろうか。北接して工人達が立ち働き、炎や煙をあげる工房群が一斉に営まれているのである。壮麗な女帝の宮殿と俗人混る工房の対照は注目される所である。

6月18日 人はいかにして考古学者になるか

－大和学・独学のすすめ－

酒井龍一

考古学は、考古資料や遺跡などを、各自の目で実際に観察し、様々な情報を入手することから始まる。

言うまでもなく、古代国家発生の中核地であった大和盆地、すなわち奈良県在住の皆様は、実物の考古資料や遺跡を眼前にして生活をされている。この特典を活用して、皆様自身で研究を実践してはいかがだろうか。

筆記具・スケッチブック・ノート・カメラ・地図などがあれば結構。先ず、現地に行き、観察できたことをノートやスケッチブックに書き込んでみよう。遺跡の現地説明会では、最新の発掘成果を紹介した「現説資料」が入手できる。これがあれば、自分で分析。様々な情報を導き出していきたい。おそらく、発掘を担当する専門家に不明な新発見ができるだろう。興味ある遺物が展示してあれば、克明に観察・スケッチ。ここでは絵心が重要となる。調査や研究の結果は、ワープロなどを使って（字の上手な人は手書き）、自分自身の雑誌を刊行しよう。

7月2日 近世大和の陣屋と陣屋町の「かたち」

－芝村を中心として－

土平博

「陣屋」・「陣屋町」という語は、小規模な城・城下町の一種、または、それに準ずる語として理解されていることや、また、城・城下町と異にして多義に用いられることから、本講座では、この語について整理することを出発点としたい。全国的なスケールで見ると、「陣屋」に相当するものは、近世の「城」よりもはるかに数が多く、また地域的にも偏在している。

現在、桜井市芝地区に遺構がみられる芝村陣屋とその陣屋町は、1万石クラスの大名がもつ小規模な城および城下町の一種とみなすことができる。近世大和には、芝村のほかに柳生、柳本、小泉、新庄諸藩の陣屋および交代寄合平野氏の陣屋などが点在した。これらは、陣屋を核として侍屋敷および町屋敷を併せもつ小規模な都市としてみなすことができよう。では、これらを城を核とする城下町、また、農業を生業とする人々が住む村落と比較したときに、どのような相違点がみられるのであろうか。「かたち」に視点をおき、様々な事例紹介を兼ねながら「陣屋」と「陣屋町」の特徴について考えてみたい。

9月24日

近代化と人間関係 - 中国から見た日本 -

蘇 徳 昌

上海は中国の経済中心で、成長センターである。その都市部及び郊外の農村部に於いて、この20年人間関係が大きく変わった。血縁・地縁で繋がっていた関係、或いは社会組織・共産党組織間の関係が人間疎外と同時に市民社会に変化する中で、崩壊しつつある。仕事を共にし、生活を助け合いながらするパターンが壊れ、義理、人情が薄れ、冷酷・無関心へと悪化するようになってきている。家族内、親族内も同じである。それが一昔前の日本と似ているのである。然らばどうすべきか。エンゲルスに否定の否定、螺旋状の進展という理論があるが、日本はアメリカに次いでもうその対応を始めているように見える。

10月15日 身の回りの化学物質とどうつきあうか

藤 原 剛

我々は食品添加物、農薬、抗菌剤などさまざまな化学物質に取り囲まれて暮らしているが、何が含まれているか良く知らないで使ったり、口に入れたりしていることが多い。これらの中には、有用な物、ほとんど問題にならないような物があるが、注意の必要な物も多い。本講演では、これらの化学物質の有用性と問題点を話し、我々はこれとどうつき合ったらいのかを抗菌商品を中心にして講演した。

10月29日 現代社会におけるコンピュータ？

湊 敏

最近私達はコンピュータ、日本語では電子計算機、という言葉をよくみかけたり、聞いたりするようになった。もともとコンピュータは電子計算機という文字が表わすように、計算をするための道具であった。高度な計算を必要としない私達にとっては、コンピュータは不用のものである。しかし、現在では、コンピュータが多くの人々に利用されるようになってきた。“現在のコンピュータ”の正体は何であろうか？この正体をあかして、コンピュータが私達の生活に本当に必要なものかどうかを考えてみる。

都祁村生涯学習シリーズ
奈良大学教養講座

自己実現をはかる生涯教育

5月7日

《大和の歴史・文化》
いま・平城京の考古学は楽しい

水野正好

江戸時代の終わり、平城京や平城宮の姿は人々の意識から消え、その所在地は完全に忘却の世界にあった。

この平城京を見事に探し出しその具体的な姿を世に顕したのは北浦定政。彼は一輪車に巻き尺をとりつけ田畦や里道を測量し平城京を復原するという“近代”的な調査法を用いて都の姿を描いた。この成果を承けて関野貞博士が平城京の研究成果を世に送るのである。

平城京も今は急激な都市化の波を受けその姿が失われつつある。開発のたびの調査で、長屋王宮や関係する立派な庭園が、また藤原仲麻呂邸と和銅開珎銭の鑄造、貴紳邸宅の数々と出産時の胞衣（後産）の埋納施設、秋篠川・佐保川と市と船などいろいろな話題が浮上している。

一方、宮内では大膳職井戸と呪詛。朱雀門前での大祓。東南院や西院の庭園など、或いは京内の諸寺の興味ぶかい新事実、再評価される諸事実が続出している。

平城京の生活がダイナミックに把握され始めたのである。楽しく披露したい。

5月14日

《大和の歴史・文化》
「大伴家持と家布」

堤博美

万葉集は日本民族の魂の詞華集である。この古典の珠玉ともいふべきアンソロジーを今に残してくれたのはそもそも誰であろうか。先学の研究では様々な人々の名前が取り沙汰されている。

平城天皇から橘諸兄。大伴家持、大原今城。そして無名の草莽の臣まで。万葉集は実にこうした大勢の人々の願いと祈りと志が一つに結集した結果、幸運にも天から授かった至宝である。

中でも、大伴家持がその編集において中心的な役割を果たしたであろうことは、諸先覚の意見の一致するところである。

大伴家持は生来その芸術的環境に恵まれていた。父旅人を初め、父の部下山上憶良叔母坂上

郎女等の愛情が彼の幼少時を暖かく育んだ。十五歳の処女作から四十二歳の万葉集掉尾の歌まで、実に多彩な詠歌が凡そ四百八十首。その題詞と左注を併せるとさながら彼の歌日誌の観を呈する。

今日もなお愛唱される歌を通じて、家持の為人と志の在りかを推断したい。

8月6日

《時事問題》 「北朝鮮の内外情勢」

大村 喬 一

ソ連の崩壊と中国の社会主義市場経済への移行は、北朝鮮にとって大変な痛手であった。

しかし北朝鮮は経済改革を拒否し、儒教的共産主義を固守し、核兵器開発を取引材料に苦境を切り抜けようとしている。

北朝鮮が内に向かって爆発するか外に向かって爆発するかは、極東情勢に多大な変化をもたらす。我が国としても、北朝鮮の未来について最大限の注意を払う必要がある。

8月20日

フランス人学生を受け入れて

田 中 良

私の家には数年前から、5月か7月にフランス人学生が2週間ほど滞在します。これは、大阪府と私の住んでいる枚方市が提携して行っている国際交流事業の一環です。これまで7人の学生を受け入れましたが、彼らと2週間同じ屋根の下で生活していて最も感じることは、フランス人でもそれぞれ、ということです。一般にフランス人は、おしゃれで、陽気で、おしゃべり... などと考えられがちですが、そうした考え方がいかに浅薄なものであるかがわかります。つまり彼らはフランス人である以前に、固有の考え方と個性を持った一人の人間であるという当たり前のことに行き当たるとのことです。その当たり前のことを理解すること、そこに国際交流の原点があるように思えます。

11月12日

《環境問題》 「地球は今～ゴミ問題、ダイオキシンを中心に～」

上 村 雄 彦

ダイオキシンは猛毒で、アトピー、アレルギー、癌、生殖機能の異常などを引き起こします。ダイオキシンや環境ホルモンのせいで、若い年代ほど精子数が減少し、このまま精子数が減り

つづけければ、将来子どもが生まれなくなる可能性さえあります。ダイオキシンはゴミを燃やすと発生します。ゴミを徹底的に減らすことが今必要不可欠です。

ところで、日本にはゴミであふれるほどの食料や資源があるのでしょうか。日本はそのほとんどを海外から輸入しています。しかし、このことで途上国の飢餓・貧困、環境破壊が起こるのです。現在世界では、毎年3万5千人の子どもたちが飢餓・栄養失調で死に、8億4千万人が飢餓で苦しんでいます。私たちがモノを大量に消費する生活とこの問題は大いに関係があるのです。

このような問題に気づき、できることを始める人をグリーンコンシューマーといいます。このグリーンコンシューマーが増えることが問題を解決する一番の鍵なのです。

11月26日

《環境問題》

「里山の野生動物とのつきあい方を求めて」

高橋春成

イノシシ、シカ、キツネ、タヌキなどの里山の動物は、古くから人々の生活と深くかかわってきました。イノシシやシカは農作物への害獣であるとともに、地域住民の貴重なタンパク源となってきました。シカはまた、神鹿信仰の対象にもなってきました。

キツネやタヌキは毛皮や毛が利用されてきました。キツネはまた、農耕神、稲荷信仰などの信仰の対象にもなってきました。

ところが、これらの野生動物がおかれている現状は、里山の開発や里山の手入れの減少、耕作地の放棄、民間信仰の後退などによって、過去とは異なった状況になっています。このような中で、これらの野生動物とどのようにつきあっていったらよいのかを考えます。

奈良大学文化講座

世界遺産のあるまち・奈良

9月16日

庭園文化の古代

－歌と宴と－

上野 誠

古代の東アジア世界においては、政治家は文人でなければならなかった。偉大な政治家は、偉大な文人であるという理想があったのである。偉大な文人は、その知的な力を表象する庭園を持たなければならなかったのである。見事な池、見事な築山に、珍しい植物が植えられ、珍獣が集う、そんな庭園を持つことが、偉大な文人の条件だったのである。

飛鳥の庭園や、平城京の庭園は、そういった東アジアの古代文化のなかで、考えてゆく必要があるのである。明治新政府の鹿鳴館に、にわかづくりの紳士淑女が集ったように、文明国の証を求めて、古代の庭園は造られたのである。

今回、お話するのは、悲劇の宰相、長屋王の作宝楼（さほろう）の宴の話である。時の宰相、長屋王はその地位にふさわしい庭園を佐保の地に造る。宝となす「作宝楼」には、天下の秀才が集っていたのである。

その作宝楼に、新羅の国からの使者がやってきた、宰相はいかに新羅の使節を迎えたのであろうか。いかに、もてなしたのであろうか。そこには、どんな花が咲いていたのだらうか。宰相の庭、作宝楼の宴の趣向はいかに…。当日は、いつものように楽しくお話いたします。話は養老7年（723）の秋にさかのぼります。

9月30日 シカと共に歩んできたまち・奈良

高橋 春成

奈良公園には、大仏とならんで奈良のシンボルとなっているシカがいる。春日大社の社伝によれば、768（神護景雲2）年、常陸の国の鹿島神社の大明神がシカに乗って春日山に入られたとされる。以来、当地のシカは、このシカにあやかって、神の使いとして特別の扱いをうけてきた。神社への参詣者は、神の使いとされるシカに出会うことを吉祥とし、牛車からおりてシカを拝礼することもあったという。このような神鹿信仰は、「三作という少年があやまってシカを殺し、穴に生き埋めにされ、石を投げ込まれて処刑された」という言い伝えがあるように、時としてシカを大切にすあまり人の命を奪ってききた。

しかし、大切にされてきたシカも、禁令のゆるんだ明治維新と食料不足が著しかった第2次世界大戦の混乱期には捕獲されるものも多く、その数は激減した。このような状況を憂え、

1947年に春日大社を中心に奈良の鹿愛護会が設立され、1957年には、奈良公園のシカは文化財保護法による天然記念物に指定された。

今日、1000頭以上のシカがすむ奈良公園周辺では、シカをめぐるいろいろな問題が発生している。その一つは、周辺農家の農作物や苗木へのシカの被害である。この被害問題は、住民がシカ害の補償などを求めて訴訟を起こすまでに至った。また、シカの交通事故死の増加、シカを襲う野犬の問題、観光客によるシカせんべいや弁当、おやつなどの給餌によるシカの生態や社会への悪影響なども指摘されている。

10月14日

平城京の人びと

寺崎保広

1200年あまり前、奈良は日本の首都であった。平城京である。その人口は10万人ともいわれる。上は皇族・貴族から、下は下級役人、全国から労働力として集められた者など、各階層の人々がさまざまな生活を営んでいた。

通常、国の公式記録である『続日本紀』や法律書である『律令』などからは、そうした人々の日常生活などを知ることはできないが、平城京の場合には、幸運に恵まれて、これを具体的に物語る資料が今日に残されている。一つは東大寺正倉院に伝えられた正倉院文書、一つは地下に残った木簡である。

本講座では、はじめにそうした二つの資料がどういった性格のものかを解説し、それを踏まえて、平城京で働く下級役人と、高級貴族の仕事ぶり・暮らしぶりをあとづけてみたい。

講座の項目と要旨は以下のとおり。

1 平城京と役人

①人口

(平城宮と平城京との関係。京の人口が20万人ではなく10万人以下であろうこと。)

②役人の世界

(貴族は五位以上で150人ほど。六位以下は「下級官人」で1万人ほど。その両者は待遇面で「天と地」ほどの違いがあったこと。勤務評定と昇進の仕組みが細かく定められていたこと。)

2 生活を知る材料

①文献史料

(『日本書紀』以下の国の歴史書や、律令格式などの法令集、『万葉集』などの文学作品がある。)

②木簡と正倉院文書

(木簡とは「棄てられたメモ札」、正倉院文書とは「倉庫の隅に積み上げられたガラクタ」であること。①に対して、全く違った性質の史料として価値があり、当時の実態を知る材料であること。)

③発掘調査

(古い時代の人々の生活の痕跡を知る材料であること。)

3 官人たちの歩み

(以下では4人の人物を取り上げ、具体的に考察を加えた。)

- ①上 馬養 (モーレッツ事務官の仕事ぶり、破格の出世)
- ②石川年足 (長生きした貴族、念願の議政官入り)
- ③出雲安麻呂 (長屋王家で働くトネリの実態)
- ④長屋王 (超エリートの豪華な暮らし)

4 おわりに

- ・日本の古代の役人の世界を二つの異なった材料から考えてきた。
- ・それは制度と実態という観点からの検討で、編纂物としての文献史料から制度の大枠を調べるとともに、木簡や正倉院文書からその実態を併せて考察した。
- ・そうすると、両者の間にかかなり大きな隔たりがあることがわかる。貴族の実態は規定以上の豊かな生活をしており、下級官人ははるかに厳しい現実だった。つまり、制度とはあくまでも最低限の基準にすぎないのであり、両者の格差は従来考えられてきた以上のものがある。
- ・これまでの研究は、編纂物中心であったが、今後ますます木簡や正倉院文書による成果が注目されることになろう。

10月21日

今に生きる古代の知恵と技

西山 要一

私たちの現在の生活の形－住まいや道具、信仰や考え方などすべての有形・無形の生活様式は、永い歴史のなかで創られ、培われ、受け継がれてきました。また、その間に変化し、不要なものは淘汰され消滅していきました。このような眼で文化財をながめてみると、国宝に指定されて寺院の宝物館に展示されている仏様も、遺跡から発掘され博物館に展示されている土器も、今は使われなくなって農家の片隅に置かれている農具も、過去の遺物・遺産であるばかりか、現在の私たちの生活の中に息づき甦ってきます。

8件の世界遺産があるまち・古都奈良は、1300年前の奈良時代の姿を色濃くとどめているだけでなく、ここかしこに、それ以前の弥生時代や古墳時代の、それ以後の中世・近世・近代の風景をとどめ、私たちが生活する現在の奈良の中に、それらを同時にみることができます。この恵まれた素晴らしい奈良の風景の中で、あらためて、世界遺産をはじめ多くの文化財をながめてみると、その一つ一つに、それらを創った人々の工夫や技、現在に連なる知恵を見ることが出来ます。

講演では正倉院の校倉と奈良の家並み、奈良漆器や奈良墨、奈良の地名・伝承などの文化財に、そして、現在の奈良にすむ私たちの生活のなかに、今も生きる^{ならびと}寧楽人の知恵と技を見いだ

し、その活用と保存について考えてみました。

10月28日

正倉院 －江戸から明治へ－

東野治之

正倉院はシルクロードの終着駅ともいわれるように、日本の古代はもちろん、世界的な文化財や史料の宝庫として有名である。しかし、古代から一貫して現状のように伝世してきたわけではなく、中世以降、さまざまな変化があった。正倉院が今日にも通じる目で見直されるようになったのは、江戸時代の末になってからといってよい。また明治初年には、それまで東大寺のものであった宝庫が、新政府の管理下に入り、宝物は皇室の御物になるという大変化が起こった。

とりわけ現在の正倉院宝物を見る上に注意されるのは、明治25年(1892)から37年にかけて正倉院御物整理掛が設置され、大がかりな復原処理が実施されたことである。今日われわれが持つ常識的な正倉院のイメージは、この事業の終了と連動して形成されたといってよい。この講座を機会に、正倉院宝物を新しい目で、とらえ直していただきたいと思う。

平成12年度 奈良大学社会学部公開講座報告

共通テーマ「異文化体験と国際交流の未来－アジアからみた日本－」

場所：奈良県中小企業会館

第1回

9月9日(土) 13:30 - 16:00

社会福祉学の視点から

テーマ：「シンガポール・ベトナムとの出会いから

－アジア型社会福祉から学ぶもの－」

奈良大学社会学部 教授 桂 良太郎

内容： 公的介護保険に揺れ動く我が国にとって、アジアの国々の社会福祉の動向から学ぶことが重要になってきた。21世紀の我が国の社会福祉のあり方についていろいろな提案がこの講座に盛り込まれ、特に家族福祉にまつわるより具体的な制度や施策が今後必要となってくることを、事例を交えながら提案された。特に急激な近代化のなかで、伝統を守り続けるアジアの人々やその価値観の多様性が今後の我が国の社会福祉を模索する上で重要な視点となるこ

とを講師のアジアでのフィールドワークを通じて学んだ事柄が提案された。

参加者 38名

第2回

10月14日(土) 13:30 - 16:00

文化人類学の視点から

テーマ：「世界を身近に考える－異文化体験と奈良の国際交流－」

(財)なら・シルクロード博記念財団 国際交流コーディネイター

西村 弥生

奈良大学社会学部講師

芹沢 知広

内容： 国境を越える人々の交流が盛んになってきた今日、異文化との出会いは豊かな未来を考える上での重要な課題の一つとなってきた。本講座では、その意義と実際について、奈良県を中心に国際交流活動に携わってきた専門家をゲストに迎えながら、文化人類学の視点から論じられた。奈良大学卒業生でもある、西村弥生氏の現在の活動から、異文化との関わりのより具体的な視点や方法について提案がなされ、その後有意義な討論が繰り広げられた。最後に芹沢氏の方から、今後の奈良県における国際交流は国際協力に転換が必要であるとの提案が評価された。

参加者 45名

第3回

11月25日(土) 13:30 - 16:00

産業社会学の視点より

テーマ：「社会学者の最新北京観光案内

－半年暮らした経験を通してトイレから現地プロバイダー契約まで－」

奈良大学社会学部 教授 松戸 武彦

内容： めまぐるしい変化を見せる北京の構造変動を、観光案内という形式を通して、社会的に考える講座である。5ヵ月暮らした生活者という視点からの“とっておき”の最新情報が多く提出された。実際に北京周辺に行ったことのある一般市民だけでなく、他の大学で研究している研究者にも有益な情報が提供された。社会現象を丹念に社会的に洞察することによって、今日の中国社会の急激な変化を分かりやすく把握すると共に、将来の中国社会の変化を模索する上でも有意義な研究的視点が多く提示された講座であった。

参加者 48名

(文責 桂)